



Essenz Philharmoniker

エセンツ・フィルハーモニカー

第6回定期演奏会

2026.1.25 SUN 13:30 開演

ミューザ川崎シンフォニーホール



Greetings / Program

本日はエッセツ・フィルハーモニック第6回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

本演奏会では、R.シュトラウスの名曲たちをお届けいたします。
金管楽器と打楽器による華やかなファンファーレ、美しい「三重唱」が印象的なばらの騎士、大自然を描いたアルプス交響曲、どれもリヒャルトらしさ全開の素晴らしい曲ばかりです。

ところで皆様、山はお好きですか？
→私の回答「とっても好き！いっぱい好き！」

私にはオーケストラの活動と同じくらい情熱を注いでいる趣味がありますが、それが登山です。日本アルプスを有する長野で生まれ育った私は、小さい頃から山に連れて行かれ、いつしか自ら登るようになり、今では時季を問わず、緑豊かな夏の山も白銀と極寒の冬山も、楽しみながら登っております。

非公式ながら当団には「登山部」なる有志の部活があり、毎年夏山シーズンにはテントを背負って日本アルプスを縦走しております（割とガチなやつです）。こういったコミュニティを有しているオーケストラはなかなか珍しいかもしれません。

さて、本日演奏します「アルプス交響曲」はまさにその「山」をテーマとした作品です。登山で生じる様々な過程と、日の出や氷河、嵐などの山の景色、それらをすべて音楽という形に落とし込んだR.シュトラウス渾身の一作です。「ああ、これはこういう描写かな？」といったように、皆様の頭の中で音を画に変換しながらお聴きいただくと、より一層面白いかもしれません。

ということで、山に登りませんか？



北アルプス 剣岳 (2999m) 山頂にて

委員長 清水 颯太

Program

R.シュトラウス
ウィーンフィルハーモニー
のためのファンファーレ

R.シュトラウス
歌劇「ばらの騎士」組曲

— 休憩 (20分) —

R.シュトラウス
アルプス交響曲



©Takashi Fujimoto

エセンツ・フィルハーモニカー

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。「とにかく楽しくやろう!」をモットーに年1回の頻度で演奏会を開催。これまでにベートーヴェン、ブラームス、ブルックナー、マーラーなどドイツ、オーストリアの交響曲に精力的に取り組んできた。本演奏会では、R. シュトラウスの名曲でありながら難曲としても知られる作品たちに挑戦する。団名に冠したエセンツ(独語:Essenz)は「本質・真髄」といった意味を持つ。



©Takashi Fujimoto

齊藤栄一 指揮

Saito Eiichi Conductor

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間にわたり、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルク音楽祭などにて指揮。

82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲『ねじの回転』(関西初演)の副指揮者を務める。84年には、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成された水星交響楽団の常任指揮者に設立当初から就任。現在に至る。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共演で、佐多達枝振り付けのバレエ『カルミナ・ブラーナ』(95年、東京文化会館)、『ダフニスとクロエ』(99年、新宿文化センター)を指揮した。その後、『カルミナ・ブラーナ』のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの『トリオンフィ』3部作(4台のピアノと打楽器版に自ら編曲)を指揮している。

また、作曲・編曲も手掛け、一橋大学管弦楽団創立100周年記念委嘱作品の『前奏曲』、『スーダラ節の主題による交響的変容』などの管弦楽曲のほか、『シンフォニエッタ』(金管十重奏曲)、『ミサ・プレヴィス』(無伴奏合唱曲)、バーンスタイン作曲『ウエスト・サイド・ストーリー』より『もうひとつのシンフォニックダンス』、TVアニメーション『赤毛のアン』エンディングテーマの三善晃作曲『さめない夢』の管弦楽版などがある。

明治学院大学名誉教授。著書に、『往還する視線—14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学』(近代文芸社)、『振っても書いてもしょせん酔狂』(水響興満新報社)がある。

Program Notes

R.シュトラウス ウィーンフィルハーモニー のためのファンファーレ

エッセツ・フィルハーモニカーは第1回のシューマン、ベートーヴェンにはじまり、ラフマニノフ、ブルックナー、マーラー、ショスタコーヴィチ、ブラームスなど、幅広い時代、幅広い国の作曲家による名曲をお届けしてきた。そんな中、第6回を迎える今回の演奏会で初めて取り上げる作曲家が、後期ロマン派を代表するドイツ(またはバイエルン)の作曲家、R.シュトラウスである。



R.シュトラウスは1864年、有名なホルン奏者の父と裕福なビール業者の母の間に生まれた。幼いころから音楽に囲まれて育てられたR.シュトラウスは、10代のころから作曲を始めている。保守的だった父の教育下でモーツァルトを敬愛していたR.シュトラウスは、次第にワーグナーに陶醉し、その革新的な音楽の影響を受け、20代後半から30代前半にかけて、『ドン・ファン』、『ツァラトゥストラはかく語りき』、『英雄の生涯』といった交響詩の傑作を世に送り出した。

30代後半以降のR.シュトラウスはオペラの作曲に興味を移し、『サロメ』や、今回演奏される『ばらの騎士』などの名作オペラを制作した。作曲家としての才能を開花させていたシュトラウスは同時に指揮者としての地位も確立しており、ミュンヘン、ベルリン、そしてウィーンといった各地の歌劇団でダクトを振っている。

晩年のR.シュトラウスは、ナチスドイツによる政治的利用という悲劇に巻き込まれるなど、決して順風満帆な音楽人生を送ったわけではなかった。しかし、彼の残した作品の多くは今も世界中で愛され、R.シュトラウスは後期ロマン派の代表的作曲家としてその名を轟かせている。

さて、少し前置きが長くなってしまったが、今回の演奏会のオープニングとして演奏される『ウィーン・フィルハーモニーのためのファンファーレ』について少々説明をしたい。『ウィーン・フィルハーモニーのためのファンファーレ』は、当時

ウィーン国立歌劇場の監督であったR.シュトラウスによって、1924年3月4日に開催された第1回ウィーン・フィルハーモニーの舞踏会のために作曲された。トランペット、トロンボーンが6管、ホルンが8管、チューバが2管という金管群に加えて、2台のティンパニというゴージャスな編成によって演奏される。演奏時間は約2分半とそう長くはないが、R.シュトラウスの豊かなメロディーセンスが詰められた一曲である。

曲は大まかに分けると、序奏-A-B-A'というソナタ形式のような構成となっている。冒頭、トランペット2本によって三連符が印象的なフレーズが奏でられる。



以降、各楽器による三連符で繋がれた動きの中で、曲は盛り上がりを見せる。同様のフレーズが転調されて奏でられた後、一転して滑らかなフレーズが登場する。



その後、再び冒頭の三連符のフレーズが多く楽器によって奏でられ、美しいハーモニーの中に曲は終了する。第1回の演奏会から約5年を迎える第6回演奏会の幕開けにふさわしい、華々しいファンファーレとなっている。

冒頭にも少し触れたが、これまでのエッセツが演奏してきた曲の中には、ブルックナー交響曲第4番『ロマンティック』や、マーラー交響曲第6番『悲劇的』といった、金管楽器に重厚な音が要求される曲目も含まれている。これらの難曲を経て磨き上げられてきたエッセツの金管チームによるファンファーレ、お楽しみいただけたら幸いである。

(中瀬涼太)

R.シュトラウス 歌劇「ばらの騎士」組曲

今日は、エッセツ・フィルハーモニカー 第6回定期演奏会にご来場くださり、ありがとうございます。

時の流れは早いもので、弊団は結成5年を迎えました。大変ありがたいことに、これまでに多くのお客様にご来場いただき、数々のご感想を頂きました。そちらを拝見いたしますと、普段クラシック音楽に馴染みのないお客様にも、多くご来場いただいていることが伺えます。そういったお客様にとって、私達の演奏会が、この素晴らしいクラシック音楽という世界への入口の役割を果たせるのであれば、それは奏者として非常に喜ばしいことです。

そのためこの場では、一般的な曲紹介の形式にこだわらず、クラシック音楽に馴染みのない方でも読みやすいような内容で、「ばらの騎士」の魅力を伝えられるよう努めてまいります。といたしますのも、もし私が読む立場であったら、その方が読んでいて楽しいからです。また、私自身の知識不足という点も理由に挙げられます。恐らく、私の知識量では一般的な形式で質の高い曲紹介を書くことは至難の業であり、そうであれば、下手に“普通”に書こうとするより、私の好きなように書いてしまおう、という次第でございます。

なにしろ、弊団のモットーは「とにかく楽しくやろう!」ですから。

話を「ばらの騎士」に戻させていただきます。

クラシック音楽界隈で「前プロ」と呼ばれる1曲目では、金管楽器とティンパニによる荘厳なファンファーレをお届けしますが、2曲目からはその他の打楽器や木管楽器、弦楽器を含めたオーケストラによる、リヒャルト・シュトラウスの名曲を披露いたします。本演奏会のいわゆる「中プロ」にあたる2曲目が、この歌劇「ばらの騎士」組曲です。

歌劇や組曲という言葉について、説明させていただきます。

元々「ばらの騎士」は、オペラ(=歌劇)として作られた作品であり、今回演奏いたします「組曲」は、オペラの劇中で使われている楽曲からいくつかを抜粋したものになります。

「ばらの騎士」は、当時すでに世間の注目を集めていた、詩人・作家のフーゴ・フォン・ホーフマンスタールと作曲家のリヒャルト・シュトラウスが初めて本格的に手を組んで作り上げたオペラです。1911年の初演後はバズりにバズり、直ちに50回の追加公演が決まったと思えばそのチケットもたちまち完売、たった6年後には既に100回目の公演が行われたほど大人気だったようです。

そんな「ばらの騎士」の物語を見ていきましょう。

既にご存知の方は、「『ばらの騎士』組曲について」まで読み飛ばしていただければと思います。

「ばらの騎士」の物語

主な登場人物

元帥夫人：元帥(軍隊のトップ)を務める侯爵の夫人。
オクタヴィアの愛人。

オクタヴィア：美形の若い伯爵。元帥夫人の愛人。

オックス：元帥夫人のいとこの男爵。粗野な好色家。
ゾフィーの婚約者。

ゾフィー：年若く美しいファーニナル家の一人娘。
オックスの婚約者。

ファーニナル：商売で成功を収めて成り上がった新興貴族。
ゾフィーの父。

ヴァルツァッキとアンニーナ：イタリア人のゴシップ屋コンビ。

第1幕

物語の舞台は18世紀半ばのウィーン。第1幕は元帥の館。元帥夫人は夫が遠出している間、自身の寝室にオクタヴィアを招き、何やらいちゃいちゃしていたようです。

翌朝、2人が朝食を食べていると訪問者の気配がしたため、オクタヴィアは慌てて身を隠して女装し、マリアンデルという偽名で小間使いのフリをします。訪ねてきたのはオックスで、ゾフィーとの結婚にあたり「ばらの騎士」を務めてくれる人物を探しているようです。「ばらの騎士」とは、婚約に際し結納として銀のばらを送るという貴族間のしきたりにおいて、実際に花嫁に銀のばらをお届けに赴く使者のこと。たいへん重要な役割のため、人選について元帥夫人の力を借りて来たのです。

ところが節操のないオックスは、マリアンデル(=オクタヴィア)の姿を見るなり口説きにかかります。元帥夫人はそれをたしなめつつ、「ばらの騎士」としてオクタヴィアを推薦し、彼の姿が彫られたメダルをオックスに見せます。オックスはオクタヴィアを「ばらの騎士」にふさわしいと納得し元帥夫人に感謝しますが、似ているとは思いながらも、目の前のマリアンデルこそがそのオクタヴィアであるとは気づきません。

元帥夫人はオクタヴィアを逃がすため、控えの間に待たせていた訪問者を招き入れます。多くの人が部屋に入ってきて、帽子屋や動物商人などが売り込みに来ます。ヴァルツァッキも元帥夫人にゴシップを売り込みますが、相手にされなかったため、アンニーナと共にオックスに取り入ることにしました。

なんやかんやでオックスが帰った後、元帥夫人は自分が若かった頃を思い出しながら時の流れを憂い、変装を解いたオクタヴィアに対して、「あなたはいずれ私より若く美しい娘のもとに行くことになるだろう」とメンヘラモードに入ります。オクタヴィアは必死に否定しますが、元帥夫人の「今は1人にして欲しい」という言葉に渋々従い、帰路につきます。

第2幕

数日後、場所はゾフィーの実家であるファーニナル家の大広間。そわそわして落ち着かない様子のファーニナル家の人々のもとに、「ばらの騎士」としてオクタヴィアンが現れます。様式に沿って銀のばらの献呈を行うオクタヴィアンですが、ゾフィーの姿を見て一目惚れしてしまいます。対するゾフィーも、オクタヴィアンに好印象を抱きます。

献呈の儀式が済み、2人が打ち解けておしゃべりしていると、未来の花婿であるオックスが到着します。しかし、その下品な振る舞いにゾフィーは驚き、オックスとの結婚がいやになってしまいます。この様子を見ていたオクタヴィアンも、表は出さないもののオックスに怒り心頭です。

そこに、ファーニナルが公証人を連れて現れます。オックスはファーニナル家の財産も目当てにしており、その姿を見るなり彼らと共に別室に移動します。大広間に2人だけが残されると、ゾフィーはオクタヴィアンに助けを求め、オクタヴィアンもゾフィーを守ると誓い、2人は抱き合います。

しかし、ヴァルツァッキとアンニーナにその現場をおさえられ、オックスに報告されてしまいます。オックスに説明を求められた2人は、ゾフィーに結婚の意志がなくなってしまったことを話しますが、オックスは全く聞き入れず、強引にゾフィーを連れ出そうとします。ここでオクタヴィアンはついに怒りをあらわにして剣を抜き、果たし合いを求めます。オックスはこれに応じますが、あっさり突きを食らい、腕に軽傷を負っただけで大騒ぎします。

騒ぎを聞きつけて登場したファーニナルはこの事態に驚き、オクタヴィアンを帰らせ、オックスとの結婚を嫌がるゾフィーに怒ります。親子喧嘩も程々にゾフィーを退出させると、オックスに事態を詫言びてワインを振る舞います。

元々大した怪我をしたわけでもないオックスは、ほろ酔いの状態で「強情な娘だからこそ燃え上がる」と上機嫌。そこにアンニーナが、マリアンデルからの逢引きの誘いの手紙を持ってきます。さらに機嫌を良くするオックスですが、これがオクタヴィアンの罠であることにはもちろん気づいていません。アンニーナはゴシップ屋としての報酬をオックスに要求しますが、適当にあしらわれたため去っていきます。

第三幕

場所は怪しげな酒場。ヴァルツァッキが人々に指示を飛ばしています。準備をしているのは、オックスを懲らしめるための様々な仕掛け。ヴァルツァッキとアンニーナは、報酬を支払わないケチなオックスに見切りをつけ、オクタヴィアン側に寝返ったのでした。

準備が整ったところへ、マリアンデル(=オクタヴィアン)と、罠の手紙に引っかかったオックスが現れます。もちろんオックスはマリアンデルを口説きにかかりますが、そこで仕掛けが動き出します。喪服を着た貴婦人の格好をして「オックスに捨てられた女」を演じ、オックスを責め立てるアンニーナ。そんなアンニーナに「あなたの血を分けた子どもたち」と紹介され、オックスをパパと呼び群がる4人の子どもたち。これらに身に覚えのないオックスは、怒って通りにいた警官を呼びます。

状況を確認する警官にマリアンデルの身元を問われた際、オックスは嘘をつき、自身の婚約者であるファーニナル家のゾフィーだと言います。そこに、オクタヴィアンの仕掛け通りにファーニナルが登場。当然、マリアンデルが自分の娘であることを否認します。加えて本物のゾフィーが現れると、野次馬がスキャンダルだと大騒ぎ。気が動転して気分が悪くなったファーニナルと、それを介抱するゾフィーが別室に退出します。

この混乱した現場に、突如として元帥夫人が現れます。これはオクタヴィアンの計画にはなかったため、彼は驚きを隠せません。そこに別室から戻ったゾフィーが、父ファーニナルからの伝言として、オックスに絶縁を言い渡します。これに憤慨するオックスをよそに、元帥夫人は大したことはないと言って警官を帰させます。更にオクタヴィアンとマリアンデルが同一人物であることを明かし、オックスに対して潔く去るように伝えます。ここで、元帥夫人とオクタヴィアンの愛人関係に、オックスやゾフィーも気づくこととなります。

オックスは、この秘密を手札として元帥夫人に交渉を持ちかけますが、全く動じない元帥夫人の様子を見て自身の負けを認め、帰ろうとします。そこに、居酒屋の主人、馬車の御者など、様々な人々がオックスを追って勘定を要求し、逃げ帰るようなオックスを追ってドタバタと退場していきます。

こうしてその場には、オクタヴィアン、ゾフィー、元帥夫人の3人が残されます。オクタヴィアンは2人の女性の間で戸惑いますが、若い2人のために自分が身を引くべきだと思った元帥夫人は、オクタヴィアンをゾフィーのもとへ向かうように言います。しかしゾフィーは、元帥夫人からオクタヴィアンを奪うことになるため、オクタヴィアンを突き放そうとします。そんなゾフィーに対しても元帥夫人は優しい言葉をかけ、オクタヴィアンを受け入れるように言ったため、ゾフィーも自分の気持ちに正直になります。

愛の言葉を交わす2人をよそに静かに退出した元帥夫人は、ファーニナルと共に再度現れます。ファーニナルは納得したような様子を見せ、元帥夫人と共にその場を去ります。こうしてめでたく若い2人が結ばれ、物語は終わります。

「ばらの騎士」の物語はいかがでしたか。

私の拙いまとめ方では十分に魅力を伝えられていないと思いますので、少しでも興味を持たれた方は、ぜひオペラをご覧いただくか、参考文献にも載せているような台本をお読みいただければと思います。

ただし、生で観劇するのは、なかなか大変です。2025年10月にはウィーン国立歌劇場による日本公演があり、私も観に行きたかったのですが、平日の一番安い席ですら26,000円と、簡単に手を出せる金額ではなく、諦めてしまいました。

ところでみなさん、お気づきでしょうか。実はここまで、本演奏会でお届けする「組曲」の話はほとんどしていないのです！
...大変長らくお待たせいたしました。それではここからは、組曲のお話をさせていただきます。

「ばらの騎士」組曲について

リヒャルト・シュトラウス 作曲 (1910年)
(伝)アルトゥール・ロジンスキ 編集 (1945年)

編成

フルート3(ピッコロ持ち替え1)、オーボエ3(イングリッシュホルン持ち替え1)、クラリネット3(E♭クラリネット持ち替え1)、バスクラリネット、ファゴット3(コントラファゴット持ち替え1)
ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ
ティンパニ、グロッケンシュピール、トライアングル、タンバリン、スネアドラム、ラチェット、シンバル、バスドラム、チェレスタ、ハープ2
弦五部

作曲者名の次の行の内容に違和感を覚えたという方もいらっしゃると思います。(伝)や編集と、他ではなかなか見ない表現が並んでいますので、軽く説明させていただきます。

アルトゥール・ロジンスキは、ニューヨーク・フィルハーモニックというオーケストラの当時の指揮者で、原作とも言えるオペラ用の楽譜から、この組曲の楽譜を作った人物とされています。(伝)につきましては、そのように伝えられているという意味で書かせていただきました。なにせスコアやパート譜にはその名前は載っていませんし、インターネットで調べても、「どうやらそうらしい」という記述ばかりで、正確なことはわからないのです。また、編曲ではなく編集となっているのは、曲を抜粋し、並べかえてつなぎ合わせた他には、組曲のシメの部分を追加しただけで、ほとんど元の曲をいじっていないためという背景があるようです。ここで、「歌はどうしたのか」と思われた方は、鋭いです。つまり、原作のオペラでは舞台上の演者が声楽パートを担当しますが、上記の編成には声楽がないため、どこかの楽器に歌の旋律を割り当てた等はなかったのか、ということです。実は、オペラ用の楽譜では歌手の旋律と同じ音をいずれかの楽器が演奏しているのです。つまり、歌がなくても音楽が成立するように書かれたため、声楽パートをいずれかの楽器に割り当てるといったような作業は不要だったというわけです。

それでは、構成を見ていきましょう。

組曲の冒頭は、雄々しいホルンと艶やかな弦楽器の掛け合いのような形で始まります。こ、これはオペラでも冒頭の部分にあたり、すなわち、その、元帥夫人とオクタヴィアンの、ベベベッドシーンを音楽で表現したもの、になります... そう言われると非常に納得できる音楽なもの、音楽の可能性の広さを感じますね。その後一気に落ち着いた曲調に転じるのも、なんというか、妙に生々しく、音楽ってすごいなあと思います。

その後、チェロに導かれるように新しい曲に移ります。オペラでいうと一気に飛んで第2幕、ファーニナル家の人々がばらの騎士の到着を待つ場面の曲です。威厳を感じさせつつもどこ

か嬉しげな曲調は、良家であるファーニナル家、また、その娘であるゾフィーを見事に表現しているように思います。音楽は高まっていき、これまた荘厳に終結。ついにばらの騎士であるオクタヴィアンの到着です！オーケストラ全体が静まったかと思うと、ばらの騎士を表すオーボエのソロが始まり、このソロは、どこか神秘的で魔法のような不思議な音色に彩られます。これは銀のばらの旋律で、銀がばらの花の複雑な形状に象られ、妖艶な輝きを放っているのをこのように表現するのか、と驚かされます。しばらくゆったりとした美しい曲が続きますが、これは銀のばらの献呈の場面。銀のばらにつけられたばら油の香りに感激するゾフィーと、そんなゾフィーに一目惚れするオクタヴィアン。そんな2人を表現した曲を、所々で先程の銀のばらの旋律が装飾します。

これが終わると、急に荒々しい曲調になります。これはオクタヴィアンとゾフィーが抱き合っている所を、ヴァルツァッキとアンニーナに見つかってしまった場面。緊急事態！という感じが伝わりますね。

この荒々しい曲はすぐに終わり、3拍子の静かなワルツに入ります。オペラでは場面が飛び、オックスが傷の手当を受けた後ワインを飲みながら上機嫌になっている箇所は曲です。派手な曲調ではなく物静かなワルツという点に、つい口ずさんでしまっているという感じが表現されているように思います。これが急に遮られたかと思えば、ヴァイオリンの可憐なソロが始まります。これはアンニーナがマリアンデルからの手紙を持ってきたため、オックスが従者たちを追い払った後、アンニーナが手紙の代読を行う場面。すなわちこのヴァイオリンソロはマリアンデルを表現しているわけですが、これは先程登場した「ファーニナル家の人々がばらの騎士の到着を待つ場面の曲」の変奏。同じ旋律に基づいていますが、ウィーンのお金持ちの家のお嬢様であるゾフィーと、純朴な田舎娘(という設定)のマリアンデルとの表現の対比が見事です。このソロが終わるとワルツは先程までの静けさとは打って変わり、盛り上がりを見せます。これは、マリアンデルが会いたがっていると知り、更に上機嫌になったオックスを表現しています。どうしてもない奴ですね...

そんなワルツが終わると、オーケストラ全体でどこか威厳を伴った曲が奏でられます。これは舞台転換の曲なのですが、実は第2幕が開く直前の曲で、すなわちファーニナル家を表す曲になります。組曲中2つ存在する、オペラの進行と異なる位置に置かれた曲の1つです。

この舞台転換の曲はすぐに終わり、場面は飛んで物語のクライマックス、第三幕でオクタヴィアン、ゾフィー、元帥夫人の三人がそれぞれの想いを歌う三重唱の場面です。三人のそれぞれの思いが交錯する非常に美しい曲で、正に一番の見せ場に相応しい音楽です。これが一旦落ち着くと、先程オーボエのソロで奏でられたばらの騎士の旋律が顔をのぞかせながら、上昇音形に導かれてオーケストラ全体での強奏が一瞬入

ります。ここは若い2人が結ばれて抱き合う場面で、これに続く穏やかな音楽は2人の喜びを表す二重唱です。

尺の都合だったのか、オペラではもう少し続くこの二重唱は組曲ではすぐに終わり、魔法のような銀のぼらの旋律が挟まると、軽快なワルツが始まります。オペラでは少し戻って、オックスが様々な人に勘定を求められながらわちゃわちゃと退散する場面。オペラの進行と異なる位置に置かれた曲の2つ目になります。このワルツは、旋律としてはワインに酔ったオックスが上機嫌に歌っていたワルツのものを用いていますが、先程の静かな曲調とは異なり、オペラの場面に合った、やや騒々しさを伴った曲調で奏でられます。

このワルツが終わると、一瞬オーケストラ全体が完全に沈黙します。続いて先程「組曲のシメの部分」と紹介させていただいたオリジナルのコーダが入り、組曲は終わります。

(和田輝羽)

参考文献:

大野真(1999)『オペラ『薔薇の騎士』誕生の秘密-R・シュトラウス/ホフマンスタール往復書簡集』, 河出書房新社
田辺秀樹 訳(2001)『リヒャルト・シュトラウス ばらの騎士』(オペラ対訳ライブラリー), 音楽之友社
小宮正安(2024)『リヒャルト・シュトラウス:《ばらの騎士》』(もっときわめる!1曲1冊シリーズ⑦), 音楽之友社
リブラリア・ムジカ「第10章『ばらの騎士』組曲との関係」,
<https://www.asahi-net.or.jp/~WG6M-MYKW/Library_R_Strauss-Rosenkavalier_10.htm> (2025/11/30閲覧)

R.シュトラウス アルプス交響曲

「パンフレットは、いつ読むのが正解なのか」

人類が未だ解決できていない難問の1つです。

私はたまに映画館で映画を見ますが、その際、基本的にパンフレットを買うことにしています。そして毎回思うので、パンフレットっていつ読むのが正解なんだろうと。

劇場に入場してから予告編が始まるまでの時間に読んだことがあります。とんでもないネタバレに遭いました。映画を見終わって家に帰ってから読んだこともあります。「その情報を知った状態で本編を見たかった」と後悔しました。

映画のパンフレットを読むタイミングの正解は、未だわかりません。

さて一方で、クラシック音楽の演奏会では、パンフレットに本稿のような曲紹介があることも多いので、基本的には開演前に読むのが正解だと思います。特に、知らない曲が演奏される時は、少しでも曲に関する情報を得ることで納得感が高まる気がします。

本稿で紹介する「アルプス交響曲」は、クラシック音楽をかじっている人の4割くらいは聴いたことがあり、クラシック音楽に触れてこなかった方の9.9割が知らない曲と私は認識しています。その前提で、この先、アルプス交響曲を紹介していきます。

1. アルプス交響曲とは

数多あるクラシック音楽の分類方法の1つに、音楽そのものを探求する「絶対音楽」と、自然風景等の何かを表現する「標題音楽」の2つに区別するという方法があります。前者の例を挙げると、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」や、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」等があります。後者の例を挙げると、ヴィヴァルディの「四季」や、ムソルグスキーの「展覧会の絵」等が代表的でしょうか。

アルプス交響曲は、とても「標題音楽」です。この曲は、ざっくりと言えば、「山に登って降りるまでを描写した音楽」です。森をかき分け、小鳥と戯れ、お花畑を抜け、ちょっと道に迷い、なんやかんやで頂上にたどり着き、嵐に襲われながら下山する、そんな一連を描写した曲です。作曲家R.シュトラウスが少年時代の登山体験を基に書いた曲だそうです。

登山したのが14歳か15歳のころ、作曲に着手したのが47歳のころと言われているので、実に30年前の記憶を掘り返して作曲していることになります。なかなかの記憶力ですが、この曲を聴いた正直な感想を言えば、記憶の遠近法が少し効きすぎている気がします。

R. シュトラウス少年が登った山は、標高1,790mのハイムガルテン山と言われています。私はこれを聞いて、「あ、意外と低いね……」と思いました。4,000mとか5,000mとか、もっととんでもない山を想像していました。

非常に大きな山を想起させる要素はいくつかあるのですが、1つは、この曲の編成の大きさです。一般的なオーケストラで要求される演奏者の人数は、60~90人くらいが相場かと思えます。

R. シュトラウスが望む演奏者の数は、150人です。常識外れと言わざるをえません。

さすがにステージに乗りきれないので、今日の演奏者は120人くらいです。

人数が多いだけでなく、使う楽器も特徴的です。

たとえば、ヘッケルフォーン。楽器を演奏するようになってから10年以上経ちますが、恥ずかしながら、この曲の練習が始まるまで本当に名前を聞いたことがありませんでした。それぐらいマイナーな楽器です。オーボエの仲間で、オーボエより低い音が出せるそうです。一番右のオーボエ奏者が演奏します。

他には、ウィンドマシーンやサンダーシートも登場します。名前のとおり、風の音や雷の音を再現します。ウィンドマシーンを使う他の曲はざりざり思いつきますが、サンダーシートは思い浮かびません。これらのような特徴的な楽器と巨大な編成を生かして、R. シュトラウスは、山を見事に表現しきるのでした。

2. 曲の各部の紹介

「交響曲」は、4つの楽章から構成されるのが一般的というか、古典的で由緒正しい定義です。R. シュトラウスはここにおいても常識外れで、この曲はなんと22個のパーツから構成されます。(また、22個のパーツは途切れることなく演奏されるため、非常に曲紹介が難しくなっています。)

一応、22個のパーツ全てについて簡単に解説しますが、全てを覚える必要はありません。特に気になった部分だけでも覚えていただくと楽しみが増すと思うので、2つか3つほど、場面を意識してみてください。

なお、22個のパーツには副題が付けられています。楽譜にはドイツ語で書かれていますが、本稿では筆者による日本語訳を付しています。

2.1. Nacht 夜

曲の冒頭、まだ山が眠っている時間帯です。非常に多くのパートに分かれた弦楽器と、管楽器が重なり、全体にぼやけた印象です。ファゴットと弦楽器たちがゆっくりと下降したのち、トロンボーンとチューバが、小さくとも荘厳なメロディーを開始します。次第に動きが増え、音が大きくなっていきます。

2.2. Sonnenaufgang 日の出

曲が始まって3分ほど後、大きな音で驚いたらこの場面です。少し前から漏れていた太陽が完全に見え始めたイメージでしょうか。「夜」ではぼやっとしか演奏されていなかったフレーズが、ヴァイオリンをはじめとする多くの楽器で演奏されます。

日の出の場面なので太陽は昇っていつているはずですが、音型としては音が下がっていく下降音型であるというのは面白いと思います。この後何度も登場する象徴的なメロディーなので、ぜひ注目してください。

2.3. Der Anstieg 上り道で

チェロとコントラバスから始まる、勇ましい、ずんずんと登っていくようなメロディーです。次第にオーケストラ全体に広まっていき、前へ前へと推進していく場面です。

また、遠くから、ホルンら金管楽器が演奏する狩りの音楽が聞こえてきます。

2.4. Eintritt in den Wald 森に入る

弦楽器のアルペジオに乗って、金管楽器が何やら不穏なメロディーを演奏しています。先ほどの登山のメロディーも聞こえてきますが、少し歩くスピードが落ちているように感じられます。

そのうち、エスクラリネットやフルート、オーボエが突然騒ぎ出します。森にいる鳥でしょうか。

2.5. Wanderung neben dem Bache

小川に沿って歩く

木管楽器や弦楽器が細かい音符で表現する小川に沿って歩き続けます。次第に音量が大きくなっていきます。

2.6. Am Wasserfall 滝

先ほどから木管楽器や弦楽器が細かい音符で下っていくメロディーで小川を表現していましたが、ついに滝に到達します。ホルンの勇ましいメロディーとともに、滝つぼに水が落ちていくかのように、様々な楽器が引き渡し合いながら急激な下降音型を演奏します。

なお、この場面は15秒ほどの短い場面です。

2.7. Erscheinung 幻

ピッコロやハーブ、チェレスタがきらきら輝く中で、ヴァイオラとチェロのソロが絡み合っています。

この場面には幻という副題が付けられていますが、水しぶきの中に虹が見えているということなのか、本当に妖精か何かの存在が現れているのか、私の見識では計りかねています。

2.8. Auf blumigen Wiesen お花畑で

幻想的な場面を抜け、ふたたびチェロとコントラバスによる登山のメロディーが聞こえてきます。次第にヴァイオリンにメロディーが受け継がれ、華々しい音楽になります。

2.9. Auf der Alm 牧場で

急に静かになったと思うと、牧歌的なメロディーと様々な効果音が聞こえてきます。ピヨピヨと鳴くピッコロ、しゃがれ声で叫ぶオーボエ、遠くから聴こえるカウベルの鐘の音……。

ほのぼのしていたのもつかの間、急にフルートとエスクラリネットが強烈な音を出したかと思えば、様々な楽器が多彩なメロディーを演奏し始めます。

2.10. Durch Dickicht und Gestrüpp auf Irrwegen 林で道に迷う

完全に迷子です。速いテンポで様々な楽器・メロディーが錯綜しています。急に静かになったり激しいメロディーが聞こえてきたりと、もはやカオスです。

しかし、次第にまとまっていて……

2.11. Auf Dem Gletscher 氷河で

金管楽器を中心に、壮大な音楽が始まります。

2.12. Gefahrvolle Augenblicke 危険な瞬間

静かになった後、ファゴットが1人で何やら演奏しています。弦楽器などが合流した後も、しばらく緊張感のある音楽が続きます。

2.13. Auf dem Gipfel 頂上にて

にわかには大きな音が聞こえます。トロンボーンとチューバが壮大なコーラルのようなメロディーを演奏し、オーボエのソロが続きます。オーボエのソロが終わると、非常に荘厳なメロディーが始まります。山頂に近づくにつれ次第に高揚していき、最高潮に至ったとき＝山頂に至ったとき、「日の出」の場面のメロディーが戻ってきます。

2.14. Vision 展望

これまで登場したメロディーたちが再登場し、幻想的で恍惚とした響きが続きます。狂乱と言ってもいいかもしれません。

私は登山の経験がないのでわかりませんが、登頂したときにはこれだけ気分がよくなるのでしょうか。

2.15. Nebel steigen auf 霧が立ち込める

先ほどまであんなに興奮していたというのに、急に音量が落ち、不穏な雰囲気が漂います。ファゴットとヘッケルフォーン(!)をはじめとする木管楽器たちが怪しげなメロディーを演奏します。

2.16. Die Sonne verdüstert sich allmählich 次第に日が陰る

先ほどの場面続き、怪しい雰囲気です。耳を澄ますと「日の出」の場面のメロディーが聞こえてきますが、ずいぶん弱々しい音です。太陽がガスに覆われていくようです。

2.17. Elegie 哀歌

弦楽器が悲しげなメロディーを演奏しています。まさに暗雲立ち込めるといった雰囲気です。

2.18. Stille vor dem Sturm 嵐の前の静けさ

クラリネットから始まり、イングリッシュホルン、フルートによるソロの掛け合いが始まります。オーボエがときおりポツポツと音を出します。雨が降ってきたようです。

2.19. Gewitter und Sturm, Abstieg 雷と嵐、下山

ポツポツ降りだった雨が激しさを増し、風も吹き始め、ついには雷まで鳴り始めます。ウィンドマシーンやサンダーシートの音を生で聴く機会は珍しいので、注目してみると面白いと思います。

フルートや弦楽器が下降する音型で嵐を表現する中、ホルンなどの管楽器が演奏するメロディーは、「2.3. 上り道で」で登場した登山のメロディーが上下反転したものです。他にも、頂上に至るまでの道で登場した様々なメロディーが変形・省略されながら矢継ぎ早に現れます。急いで下山している様子が伝わってきます。

2.20. Sonnenuntergang 日没

嵐が止み、非常に穏やかな音楽になります。下山にも成功したのでしょうか。「日の出」のメロディーが長く引き延ばされ演奏されます。次第に音量が落ちていき、日没を感じさせます。

2.21. Ausklang 余韻

オルガンが「日の出」のメロディーを演奏し、場面が始まりません。途中やや高揚しますが、全体的に穏やかな雰囲気です。今まで登場してきたメロディーが再現されます。

登山を終え帰宅し、1日を思い出している場面かなと、私は勝手に解釈しています。

2.22. Nacht 夜

アルプスにふたたび夜が訪れます。冒頭と同様にぼんやりとした響きの中で、「日の出」のメロディーや登山のメロディーがゆったりと演奏されます。やがて全ての楽器が動きを止め、静かに曲が終わります。

(田中秀和)

Members

コンサートマスター：小染慶

第1 ヴァイオリン

荒金香帆
伊藤拓也
落合友佳里
金子祐理
◎ 小染慶
小林奏詠
小林紗耶夏
斎藤玲菜
櫻田泰斗
佐藤由梨花
城田咲
三野真柚稀
森勇人
藪野三音奈
山本妃奈乃
劉守珩

矢野凜

渡邊梓

ヴィオラ

網中愉香
伊奈裕貴
小川雄成
鈴木千奈
高岡広太郎
◎ 高橋熙
土谷夏仁
那須央幸
古荘智佳子
前田あゆ美
松井歩
宮崎春菜
山本祐希奈

コントラバス

上野未夢
岡崎愛
草山雄杜
栗田真帆
◎ 小島辰仁
清水樹
橋場美羽
廣岡穂乃香
丸尾麻
和田輝羽

フルート

井上弘誠
今城琴美
小川真央
高田颯音
◎ 滝原真琴

オーボエ

池側真琳
◎ 菅野勇斗
黒川達郎
寺田晴香
山岸平蔵

ヘッケルフォーン

宮川真人

クラリネット

越智健介
小林桃子
清水樹土
田中秀和

◎ 山岸雄作

吉田紗雪

ファゴット

◎ 薄井潤一郎
柿崎丈青
金子裕亮
野口滉太
萩田智樹

ホルン

池水香穂
江原春花
大高直哉
大沼菜摘
片山銘弥
金井彩音
島啓
清水颯太
田村和俊
釣部祐希
平岡沙菜
深村美佳
水上慶人
◎ 満石卓斗
山崎智哉
山田慧
渡辺碧

トランペット

市川りを
神山優美
◎ 倉林佳祐
櫻木こころ
中瀬涼太

トロンボーン

◎ 青木俊輔
奥本ひかる
貝沼祐希
黒川智史
鈴木亮太郎
中井みずき
山内玲
山田萌楓

テューバ

井上拓
植松隆治

パーカッション

◎ 安西理玖
高良佑佳
小林大治朗
渋谷皆見
鈴木佳奈
高橋奏良
箱田健太

ハーブ

東森真紀子
渡辺かや

オルガン

千田寧子

チェレスタ

築田喜久子

◎：パートトップ

トレーナー（敬称略）

内山厚志
鈴木睦
永田由貴
林憲秀
古野淳
鷺見精一

運営委員

委員長
清水颯太

委員

安西理玖
今城琴美
岡村昂洸
小川真央
越智健介
菅野勇斗
小島辰仁
小染慶
小林桃子
高岡広太郎
滝原真琴
田中秀和
野口滉太
松井歩
山岸雄作
和田輝羽

フライヤー・パンフレットデザイン

水本紗恵子



次回演奏会のお知らせ

第7回定期演奏会
2026年8月16日(日) 昼公演
東京芸術劇場
指揮 高井優希



チケット購入はこちらから

曲目

ラヴェル／組曲「マ・メール・ロワ」
マーラー／交響曲第5番



ホームページ



YouTube

Mail : essenz.philharmoniker@gmail.com

X : [@Essenz_phil](https://twitter.com/Essenz_phil)

Instagram : [@essenz_phil](https://www.instagram.com/essenz_phil)

[発行] 2026年1月25日(日)

[編集] エセンツ・フィルハーモニカー

※無断複写・転載などを禁じます。